空手道について（二段補）

平成２４年４月１５日

西東京本部　浜田山支部　矢野宏明

テレビの映画を見ていて気になるセリフがありました。「生きている人はいつも死んでいる人だから」と言うのです。最初は何のことか分かりませんでした。よく考えると、人は生まれた瞬間に死に向かって進んでいます。生物学的には、毎日何千万個の細胞が生まれると同時に、同程度の細胞が死滅しているということ。この差し引きがある値を超えた時に、連続した死を迎えるのではないかと思います。

私は、今年50歳になりましたが、年々体が思うように動かなくなるのを実感しています。初段になった時に「もうやめようかな。潮時かな」と思いました。それでも空手をやめないのは、体を強制的に動かすことで何か得られるものがあるからです。

動かないなりに、ここまではできたという

20 × 20

実感、あるいは、昨日まではできなかったことが、少しずつできるようになる喜びは、この歳になると中々得にくいものです。更に言えば、これを1人で黙々と行うことは難しい。道場に通って仲間と一緒に行っているから続けられるのです。

　私にとって空手道とは、常に傍らにあって自分を励ましてくれるものになったようです。もう少し、空手に見放されるまでは、大切に続けていこうと考えています。

20 × 20